箕面市中央生涯学習センター　千里金蘭大学連携講座「現代社会を考える」

地域社会の再発見

2007 年 2 月 7 日(水)

千里金蘭大学人間社会学部
寺口瑞生(てらぐち　みずお)

1.　地域を見る視点～過疎問題の現場から

私は環境社会学の立場から，日本各地の地域社会の実態を研究しています．ここ 10 数年は紀伊半島各地をフィールドとしながら，とくに三重県南部・東紀州地域(＝奥熊野地域)を主たる研究対象としています．

この地域は人口減少が進み，高齢化・少子化が深刻な「過疎地域」です．過疎地域の抱える課題＝過疎問題は，事の性質上，選挙で選ばれる国会議員の主要な関心とはなりにくいものです．しかし，現在の過疎問題は過疎地域だけの問題ではなく，日本全体の問題であるといえます．その理由として，次の 2 点を挙げることが出来ます．

1)　高齢化の先進地域

2)　自然と人間の接点

それゆえ，過疎問題・過疎地域を学ぶことは，日本全体の行く末を考えるときに大変参考になります．

2.　地域資源の再発見

かつて「過疎地域」は「遅れた地域」であるという見方が支配的でした．それは，「近代化」をよしとする考え方に基づいています．しかし，その考え方の延長線上で地球規模の環境問題が深刻化し南北問題や政治対立も継続しています．現在の過疎地域では，「田舎から都会へ」というかつての眼差しとは異なる，「田舎と都会の連携」の視点が重要視されてきています．そんな眼差しで地域を見直すと，これまで気づかなかったいろんな「宝物」が見えてきます．今回は，その一つの例として，「熊野古道」の世界遺産への取り組みを紹介します．

3.「何処に住むか」から「どのように暮らすか」へ

地域を見る視点を変えることで，過疎地域のあり方はずいぶんと変化しました．自分たちの地域の宝に気づいた人々は，自分たちの住む地域に誇りを持ちます．そして，その誇りは，自らの生活スタイルにも変化をもたらしました．それは，地域生活をどのように楽しむのか，というスタンスを生み出します．自分の地域に誇りを持ち，暮らしを楽しむという視点，これこそが，日本全国何処へ行っても，最も重要な視点であると思います．